

# もう一つの世界 [四]

## 緑川すゞ子

### 第四章 濁流

多感な亮子は継父である武谷を避けるばかりか、母である美也に対しても距離を置いて接するようになった。亮子だけでなく勇も、気づいた時には無邪気な笑みを見せなくなっていた。そんな悩みを抱えながら、美也は商売に明け暮れる。たまに会う糸田にそれとなくぼやくと、「反抗期はこの子も、むつかしかよ」と受け流される。次第に美也自身も「反抗期だから仕方がない」と、子育ての気掛かりを後回しにするようになっていった。

学校から帰って、美也にまわりつくのは晶子だけだ。しかし、その晶子にも構ってやれる時間の余裕がない。店先にはひっきりなしに客が来る。父の遺産を無為に費やす

ものかという美也の内心の熱く固く燃える鉄芯のような思いが、一人の客もそんざいに扱うことを許さなかった。

精彩を欠いていく子らの笑顔と対照的に、店先には色とりどりの服を着たマネキンが並んだ。美也はデパートで新商品を見ると、似たものをすぐに仕立ててみるのだ。映画や雑誌も参考にし、流行を取り入れる。だが、あくまでも着る人の体型をカバーし、上品で長く愛用される洋服を作るよう心掛けた。

一度美也の店で仕立てた客は、友人を連れてくる。家族も連れてくる。評判の店になり常連客が増えた。忙しさに紛れて、美也は子らの表情もあまり見なくなっていた。構ってやれない心苦しさを補おうとしてか、小遣いは言われるがままに渡してやった。亮子と晶子は本屋で本を買ってきては店の奥座敷でおとなしく読書し、客が引くのを待



って母と連れ立って帰る。けれども勇は店にも家にも帰らず、腹を空かせると買い食いをしたり、すぐ近くの映画館に入り浸ったりして、ぶらぶらと外を出歩く悪癖がついた。

美也が忙しくなる一方で、武谷は仕事の帰りに飲んで帰ることが多くなった。子どもたちが成長し、夜道を送る必要もなくなったので、たいていは夜更けて家に帰ってくる。

「おい、勇は—  
ある晩、武谷が帰宅してすぐに美也に聞いた。

「いませんか—  
「おらん—

「友達と遊んでいるんでしょ—

「呆れた母親だな—

「だって、もう中学生ですから、暗くなるまで帰らないことくらいあるでしょう—

武谷は害虫を噛み潰したような顔をした。美也は走り回る高秋を「危ないからあっち行ってなさい」と叱りながら、土間で練炭の火を熾す。

「そげん高秋ば叱るな、かわいそうか。大体なんで今時分、火を熾しよるんか—

「お魚焼こうと思つて。あなた、晩御飯まだでしょ—

「いらんいらん、もう寝る!—

したたかに飲んで帰ることも増え、武谷は頻繁に外食するようになった。自分の稼ぎは全部自分ひとりで使う。財布が空になると、美也に無心した。初めは昼飯代と称して百円、二百円のかわいいものだった。そのうち、飲み代が足りない、亭主に恥をかかせるのか、と言い出す。寝ている間に財布に金を入れておくと威張るようになった。知らん顔を通していく。そういう時、武谷は盗つ人のように猫背になる。そんな背中を子らが遠巻きに見る。

亮子、勇、晶子の三人の心のうちで、父親ができた喜びは数年のうちにすっかり冷め、冷たく固まった煮凝りのように沈み、消えてしまったようだった。今や美也と夫をつなぐ糸は幼い高秋だけだ。しかし、その高秋の起きている時間に武谷が帰宅することはまれだった。

文化街でスナックを経営している元妻と繕いを戻しているのでは、と糸田が心配した。営業部の社員が時々武谷を文化街で見かけると噂していたそうだ。武谷の元妻が経営しているバーは進駐軍の客も多いらしく、他の店の比ではないほど上等の酒を置いているらしい。

「どっかの社長連中ならともかく、安月給のサラリーマンが飲める店やないらしいよ—

だが美也は武谷の素行にとにかく言うことはしなかった。

元妻とよろしくやるならやればいい。むしろうれしくらいだ。夜中に酒臭い息で被さられるより、飲んだくれて熟睡してくれた方が百倍もマシだと思っていたからだ。

ある日の夕暮れ時、店に派手な女たちの集団がやってきた。さんざん展示品を撫でまわし、「地味すぎる」、「趣味に合わん」と笑い合う。髪をシュークリームのように結い上げ、きつい香水が匂った。美也は拱手しにこやかに見守っていたが、女たちの中の一人が美也に寄ってきて、ささやいた。

「あなたが武谷高造の奥様？」

美也は驚き、頷く。

「そうですが……？」

「へえ……」

女は厚化粧に隠しきれない染みが頬骨に浮き上がり、五近いように見えた。目の大きな、目立つ顔立ちの美女である。彼女は片頬に形容しがたい微笑を浮かべた。それがどんな笑みなのか美也には分からなかった。しかし、嫌な気持ちがあった。同時に、彼女が何者であるかが分かった。

「二人一着！ 好きなのを買うてよかよ」

その女が号令をかけるように言い、他の女たちが途端に目の色を変えて服を選び始めた。十分後、手に手に一着ずつ展示品のワンピースを抱きかかえ、女たちはレジに集ま

った。どの女も若くスタイルが良いので補正の必要もない。合計は結構な金額になったが、女が現金で払った。赤い鱈皮の財布には札束が詰まっていた。きゃあきゃあとかましい集団が引き上げていくと、女が去り際に振りむいた。「あんたも忙しかろうけど、もうちつと高造の手綱ば締めてくれんかね。うちの店で毎晩くだ巻かれて迷惑しとるとよ」

美也は深々と頭を下げた。

「すみません、でも……わたしは言うて聞くような女じゃありませんから。よくご存じと思いますが」

女は一瞬無然としたが、諦めたような鼻息をついた。

「そろそろやね、あんたもお気の毒に」

昭和二十七年、美也は三十五歳。勇は十三歳になっていた。声変わりし、背丈も美也をはるかにしのいだ。次郎に似てすらりと細身の凜々しい少年だ。けれども次郎と違って勇は寂しそうな暗い眼をしている。

ある晩、美也は遅く帰ってきた勇を玄関で待ち構えていた。勇はポケットに手を入れ、斜めに顎を上げた。

「勇、どこ行ってたの」

「なんでや」

「この頃、進駐軍と一緒に煙草吸いよる中学生がおるつ

てよ。それも悪い煙草。おそろしい中毒症になってしま  
うてよ」

勇は顔を顰めた。

「僕は、そげな馬鹿じゃなか！」

「じゃあ、どこに行つてたの」

勇は雑囊から帳面を引つ張り出し、美也に差し出した。

美也がそれを開いてみると、びつしりと数式が並んでいる。

「横山先輩に習いよるつたい、数学を」

「まあ、そうやつたん」

横山というのは同じ商店街で呉服屋を営んでいる店の子  
で、勇より一つ上の学年である。とても聡明な子だと噂に  
は聞いていた。

「数学が苦手やけん、教えてもらいよる。僕は将来お父  
さんのように設計士になりたいけん」

美也は、ハツとして階段を見上げた。勇はこの頃、亡き  
次郎のことをお父さんと呼ぶようになり、その言葉を武谷  
が聞いたらどんなに怒り狂うかと思うと気が気じゃない。

しかし、二階からは酔って寝ている武谷の高いびきが聞  
こえていた。そんなふうにあつて夫に氣を遣う美也の仕草を勇は  
冷やかに見た。

「勇は勉強に目覚めたんやねえ、偉いね」

美也は勇に触れようとした。勇は、すつと体を斜めにか

わして、逃げるように大股に家に入つて行つた。ふわりと、  
いがらっぽい煙草の匂いがした。

勇はほとんど家にいつかなくなつた。横山先輩のところ  
へ行くと言つて出て、帰らないことが増えた。

昭和二十八年五月のある日、美也は旭屋デパートでカス  
テラを買い、横山呉服店に行つた。薄桃色のツーピース姿  
で風呂敷包みを抱えた美也が暖簾をくぐると、呉服店の広  
々とした上がり框にいた客が一斉に美也を見た。

「おいでやす、何かお探してつしやるか」

うぐいす色の着物を着た女性が立ち上がった。柔らかな  
物腰の中に品格がある。

「はあ、に……、武谷勇の母でございます」

うっかり西山と言ひそうになつて動揺する。

「ああ、勇君の」

呉服店の二階に通された。一階とは打つて変わつて洋風  
の応接セットが並んでいる。

「うちも、ちようどお会いしたいと思つてました」

豊かな黒髪を古風に結び上げた綺麗な人だ。顎の横に大  
きなほくろがあるのが、妖艶な印象を強めている。美也は  
この人を確かにどこかで見たことがある、と思つた。どこ  
だろう、と考えながら、会釈して座つた。クッションの効

いた別珍のソファだ。

「すみません、ご挨拶が遅れまして。息子が大変お世話になっております」と頭を下げた。顔を上げると、女将さんはいじつと美也の顔を見た。美也も見返す。

「あら、芙蓉歌会の？」と同時に言った。前に文江に連れられて参加した歌会にいた横山和子という人だった。ほとんど末席にいた美也は臆気にしか顔を覚えていなかったが、和子の方では美也をはっきりと思い出した様子だった。

「あなた、ええ歌をお詠みになっていらしたのに、急におやめになって惜しかったわあ」と、和子は言った。美也は彼女がどんな歌を詠んでいたのかさっぱり思い出せず、ただ恐縮して頭を下げた。

「勇君はいい子ねえ」

「そうでしょうか、この頃、外泊ばかりして。お宅様にも何度か……」

和子は首を傾げている。どうやら勇は横山家には泊まっていなかったらしいと察した。

「すみません、あの子、嘘をついていたのかも知れませんが」と言い、美也は苦笑いのため息を吐いた。

「あら、そうとは限りませんよ。紀夫に聞いてみないことには」

美也が「え？」と目で問うと、和子は気まずそうに笑っ

た。

「紀夫がうちのひとこれで」と、和子は両手でバツ印を作り、さらに人差し指同士をチャンバラのように動かす。

「父親と息子は衝突するもんやと聞いているけど、なさぬ仲やと余計にぶつかるのんどすなあ。結局、紀夫は夫の両親が引き取ってくれてますのや」

同じような環境の家もあるらしい。お宅の子が年中うちに泊まって困ると苦情を言われるかも知れないと覚悟していたから、美也は内心で安堵した。

「紀夫のほんまの父親は戦死しましてね」と、和子は言った。

「で、私が連れ子で再婚したのが、この呉服屋を営む横山ですの」

和子は顎を引き、部屋をぐるりと見まわした。壁には高価そうな絵が何枚も額に飾られている。

「わが一人息子のために良かれと……ね」

あからさま過ぎる気もしたが、意味するところはよく分かった。

実はうちの勇も夫の武谷とはなさぬ仲で、と美也は打ち明けた。戦死ではなかったんですが、と付け加える。三人の子を儲けたところで前夫が怪我で急死しまして、と、あれほど口にするのもつらかったことをすらすらと言えるよ

うになった自分に驚きもする。和子は途端に打ち解け、さ  
まざまに夫の愚痴まで言い募った。

「難しい年ごろの子おやさかい、大人のほうが寛大にな  
ればええのんにとって、いつも思いますのんや」

そや、どうせやからお連れするわ、と和子は立ち上がり、  
横山の実家へ案内した。商店街を駅に向かって抜け、更に  
駅から十分ほど歩いた五穀神社の裏手を下ったところに、  
その屋敷があった。

築地の一部が崩れているのは空襲のせいだと察せられた。  
改築された真新しい木造の二階建てで、庭に面した広縁で  
二人の少年が笑いながら広げた雑誌らしきものを見ている。  
一人が勇だと、美也には遠くから分かった。

カステラは和子が気を利かせて、そのまま紀夫の祖母に  
手渡した。白髪を後ろで丸めた、おっとりとした優しそ  
うな夫人だった。

「はきはきとした利発な坊ちゃん、紀夫の友達になっ  
てもらって有難いくらいですよ」と夫人は言い、懐手をし  
て出てきたご隠居も、「離れに紀夫一人じゃ寂しかろうか  
ら、ずっと泊まってもろうてよかですよ」と言った。

話し声を聞きつけて座敷に紀夫が顔を出し、すぐに勇を  
連れてきた。勇は「ちえ、おふくろか」とバツの悪そうな  
顔で奥へ引き返す。

「勇、ちゃんと夕方には帰りなさいよ」と、美也が背中  
に声を掛けると、

「おばちゃん、そら酷ですわ」

紀夫は和子のアクセントを真似たような言い方をし、ダ  
ダダッと廊下を走り去った。

「まあ、呆れた、生意気言うて」と和子は言い、美也に  
「堪忍な」と会釈した。

その晩、勇は帰宅した。さすがに他人の一家に恐縮して  
いる母親の姿を見て悪かったと思ったのだろう。美也は魚  
屋で鰻の干物を買ってきて、勇の好物の里芋の煮しめも作  
り、久しぶりに子どもたちが揃って食事をした。亮子と晶  
子にも笑顔が出た。

そこへ珍しく武谷が早く帰宅した。

「ほお、豪勢な」と食卓を見て言った。早い時間なのにも  
う酒臭い。

「干物がや？」と、半笑いの顔で勇が言った。武谷は赤黒  
い顔でじろりと睨んだ。美也は冷やりとしたが、武谷はす  
ぐに風呂場に行った。

「お父さんに口答えするんじゃないやしません」と、美也は勇  
をたしなめた。

「お父さん？」と、勇は鼻で笑った。

風呂から上がってきた武谷は、浴衣の紐を結びながら言った。

「勇、この頃外泊しよるち聞いたぞ、こん悪僧が！」

勇は横を向いて黙っている。美也は慌ててとりなした。

「そのことなら今日、横山さんの家にお詫びに行つてきましたけん」

「横山？ 横山呉服か？」

「はあ、そうです。勇の一つ先輩の息子さんが……」

説明する美也の言葉に被せるように、武谷は声を荒らげた。

「お前、わざと俺に恥かかせよるんかっ！」

亮子は驚いて席を立ち、晶子の手を引いて奥座敷に逃げた。勇は立ち上がり、武谷を睨みつけた。武谷はますます目を見開く。顎を上げ下げして勇を威嚇した。

「おい、横山呉服はデパートにも店が入つとんぞ？ 知つとろうが！」

「それがどうした！」

勇が初めて、武谷に面と向かつて返した悪態だった。

「なんだと？」

「気の合う先輩やけん付き合いよるつたい。あんたの仕事と何の関係もなか！」

「きさま、父親に向かつてあんただと？」

武谷は勇の襟首を掴んだ。首元を締め上げるように持ち上げる。美也は叫んだ。

「やめて！」

大声に驚いて、高秋が泣き出した。武谷は手を緩めない。鬼のように赤黒い顔で勇を持ち上げる。勇は背丈こそ武谷と変わらないほどまで伸びているが、まだひよろりとした少年である。肩も腰もみっしりと筋肉の張った武谷にはかなわない。

足が浮かび上がるほど持ち上げられて、勇の唇が青ざめている。美也は金属的な悲鳴を上げた。それから死に物狂いで武谷の腕に噛みついた。

「いたっ、こいつ……」

亮子が玄関から裸足で飛び出して行つた。「助けて！ 衛藤さん、衛藤さん」と向かいの家に向かつて大声を上げる。勇の唇は青紫から白っぽく変わっていく。

衛藤の家の引き戸がガラリと開く音がして、ようやく武谷は手を離れた。勇は人形のように床に倒れ、体をくの字にして咳込んだ。

衛藤が茶の間に駆け上がってきた。倒れた勇、腕に血を流して赤鬼のように仁王立ちの武谷、そしてまだガタガタと震えながら、「やめて、やめて」とうわ言のように言い続けている美也。傍らでは高秋が泣き喚いている。亮子は勇

のそばに屈み、武谷を糾弾するように睨む。

「お父さんが勇を殺そうとしたんです」

亮子が言い放った。

「武谷さん、どうしたこつですか」

衛藤は眼光鋭く武谷を見据えた。武谷は風呂場に吊るした背広から財布を取り出し、浴衣の袂にしまうと、茶の間を素通りして出かけようとした。

「待ちなさい」

衛藤が呼び止めた。

「ちゃんと話はせんかね」

「ふん」

武谷は鼻でせせら笑った。

「俺は一体なんだ。ガキになめられ、女房にや噛みつかれて、拳句に他人からまで説教されないかんとですか」

武谷は衛藤を振り払い、玄関で雪駄をつっかけ、出て行った。

勇は壁に凭れて座り、悔しそうに声も立てず涙を流していた。美也は安堵で崩れそうになりながら、勇の背を摩擦した。「ああ、勇、勇……」と、うわ言のように繰り返す。

「首ば絞められたとか」

衛藤は畳に膝をつき、勇の顔を心配そうにのぞき込む。

「あなた、勇君はうちで預かりましょうよ。取り返しのつかんことにもなつたら……」

いつのまにか文江も横に立っていた。戦時中も、文江は何度も子らを預かってくれた。美也は頭を床につけて礼を言い、涙にむせた。

それから何日間か勇はおとなく衛藤家に泊まっていたが、そのうちまた横山先輩の家に入り浸るようになった。

美也は再び菓子折りを持って、今度は横山家の離れに正式に居候させてもらえないかと頼みに行った。家賃を払うから、と。

「家賃なんてとんでもなか」と、老婦人は言った。ご隠居さんも出てきて、「昔からうちには書生さんがよおけ居候しとったけん、いっちょん気にはならんとですよ」と笑う。ご隠居さんはかつて大学で教鞭を執っていたのだと、そのとき知った。

「離れを貸す代わりに、掃除に風呂焚きに使い走りまでやってもらおうんじゃから、謝礼やらされてはかえって困ります」と老夫婦はくどいほど言った。

そこで、美也は店の小さな台所で惣菜を作ったりデザートで買ったりして、毎日おかずを届けた。老婦人はこの頃料理が億劫だからと言って、差し入れは喜んで受け取って



くれた。

この暴力の一件以来、美也は武谷と別れることを真剣に考え始めた。けれども、どうやったら離婚できるのかが分からない。市役所の相談窓口の予約手続きをしようにも、店の休みの日でなければ都合がつかない。そうこうするうち、武谷は再び牙を引つ込め、時折は美也に媚びるような冗談を言うようになった。

武谷がおどけて見せる時、武谷と出会った最初の頃を思い出す。美也は彼をチャップリンに似ていると思つた。どこか<sup>ひょうきん</sup>剽軽で憎めない男だと。今は、まったくそうは思わない。彼のおどけ方はわざとらしく、ふざけた後にほんの一瞬、美也の心理を見定めるような眼差しをする。その目の底には不気味な凄みが沈んでいた。

美也は武谷の中に狂気を見出した。美也の心の底に、その狂気への怯えが巣くつた。その怯えの感情は、美也をますます武谷から遠ざける。夜半、武谷がのしかかってくる時、美也は恐怖を覚える。首元に指を掛けられると、今にも殺されるのではないかと恐れた。月明りの差し込む中、獣のような男に組み敷かれた美也の肌には青白い鳥肌が立つのだった。

ある晩、無言で腰を動かす男の向こう側に、線路の軋む

音を聞いた。空間が裂け、遠くに銀河の渦が見えた。美也は人形のようになされるがままに仰臥して、「たすけて」と唇だけを動かした。ミシリ、と音がした。一瞬、武谷の動きが止まった。

美也の頬を涙が伝つた。間違はなく階段の軋む音だった。亮子に見られたのに違いない。奈落の底へ落ちていくような気持ちがした。

武谷は胡坐をかいて煙草を吸つた。

「あいつもそろそろ興味があるんかな」と、独り言のように言つた。美也は激しく首を振つた。

「止してください、そんな言い方!」

武谷はシシシと笑い、枕元の灰皿で火を揉み消すと、ごろりと横たわり屁をひつた。

何故、こんな男を招き入れてしまったのか。女手ひとつでも、いや、むしろ私一人の方が子らは安心して暮らしていられたものを。

今からでも遅くはない。引き返そう。別れよう。

美也は薄青い月光の差し込む部屋で、まんじりともせず宙を睨んだ。

ところが、朝になれば子らを食べさせ、学校に送り出し、店を開ける。この忙しさの中で何の行動も起こせないまま、

またひと月が過ぎた。

六月に入ってから、大雨が降り続いていた。止んだと思つたらまた降る。

福岡でも全域が浸水したと伯母の千代が葉書をよこした  
が、見舞いに行く暇もないまま、久留米も筑後川がもうす  
ぐ氾濫するとみんなが騒ぎ出した。

六月二十五日の朝から豪雨が続き、商店街も開店休業状  
態だった。美也は店の在庫をすべて二階に移した。二十六  
日、晶子の通っている南薫小学校が休校になった。今日は  
もう店を閉めようと決め、陳列した洋服を引っ込めていて、  
目を見張った。路面にも雨水が帯状に流れていく。排水の  
側溝が溢れている。小走りに裏手の池町川を見に行くと、  
とうに水は溢れて、どこが川やら岸やら分からない。  
慌てて店に戻ると、亮子も帰っていた。唇を紫にして、  
わなわなと震えている。

「どうしたの、亮子、ずぶ濡れで」

「川が決壊する！」

「なんて？」

「筑後川が、もう溢れよるって！」

この春から高等女学校に通っている亮子は、朝礼後にす  
ぐ帰宅させられたと言う。

「大急ぎで家の人と高台に避難しろって言われた」

商店街でも人々の様子が慌ただしくなった。合羽を着て  
土嚢を積んでいいる人もいる。

「洪水です！ 避難、してください！ 高いところに、逃  
げてくださーい！」

町内会長が鉦を振り鳴らしながら、声を張り上げて通つ  
た。

美也は奥で遊ばせていた高秋をおんぶ紐で背負う。

「晶子は？ アッコお！」

「はあい」と二階から聞延びた返事が聞こえ、晶子が欠  
伸しながら下りてきた。

「高いところって、デパートよね？」

晶子が靴を履くや否やその手を引っ張って、亮子は駆け  
出した。美也は「待って、亮子」と呼び止める。亮子は苛  
立つて振り返る。

「何？」

「勇は今どこにおるやろうか」

「知らんよ。横山さんのところやろ。勇なら泳いででも  
逃げようもん。でも、晶子や高秋は流されて死んでしま  
うとよ！」

その通りだ、と美也は思った。四人は走り出す。あちこ  
ちの家や店から人が飛び出してきて、皆一様に旭屋デパー  
トを目指して走る。